伊都国歴史博物館

紀　　要

創刊号

2006

序

伊都国歴史博物館では、『魏志』倭人伝に登場する伊都国を中心にすえ、その前後の悠久の歴史と文化に関する展示を行っています。展示の内容は学術的な根拠にもとづきながら分かりやすく、そして興味をそそり楽しめるよう心がけています。

そのため博物館の業務は、基礎資料の収集・保管と調査・研究、常設・企画の展示、さらに啓蒙・普及など多岐にわたります。そのうち博物館業務の基本ともいうべき分野は、基礎的で日常的な調査・研究活動です。そこで学芸員は、博物館業務全体に携わりながら、寸暇を割いて調査・研究にたゆまぬ努力を続けています。

このたび発刊することになりました『伊都国歴史博物館紀要』は、そのような学芸員の活動成果を世に問うものです。創刊号では、たまたま伊都国の王都の遺跡として知られる三雲・井原遺跡の構造的変遷や、手工業製品の生産と流通に関する伊都国・奴国の比較研究が内容となっています。こんごは、前原市教育委員会文化課の専門職員の協力も得ながら、伊都国を時間・空間軸の交差点と位置づけ、広く糸島地域の永い歴史と深い文化に関する調査・研究のフォーラムとして、本紀要を活用していきたいと念願しています。

当館のさらなる発展のため、皆さまのご指導、ご協力とご鞭撻をお願い申し上げます。

平成１８年３月３１日

伊都国歴史博物館

館長　西　谷　　正

目次

生産と流通からみた伊都国と奴国　平尾和久・・・・・・・・・1

三雲・井原弥生集落の成立と変遷　角　浩行・・・・・・・・・15

生産と流通からみた伊都国と奴国

平尾　和久(伊都国歴史博物館)

Ⅰ　はじめに

糸島地域と春日丘陵を含めた福岡平野はそれぞれ『魏志』倭人伝に記された伊都国と奴国の故地といわれる。両地域ともに前漢鏡を30面前後副葬する厚葬墓が認められ、各地域を統括した王の墓とされる。また、近年、発掘調査の進展とともに手工業生産の様相も明らかになりつつある。

そこで、本稿では両地域の生産と流通の変遷をたどることからはじめ、共通点と相違点を明らかにし、北部九州における生産と流通の特徴を抽出することを目的とする。

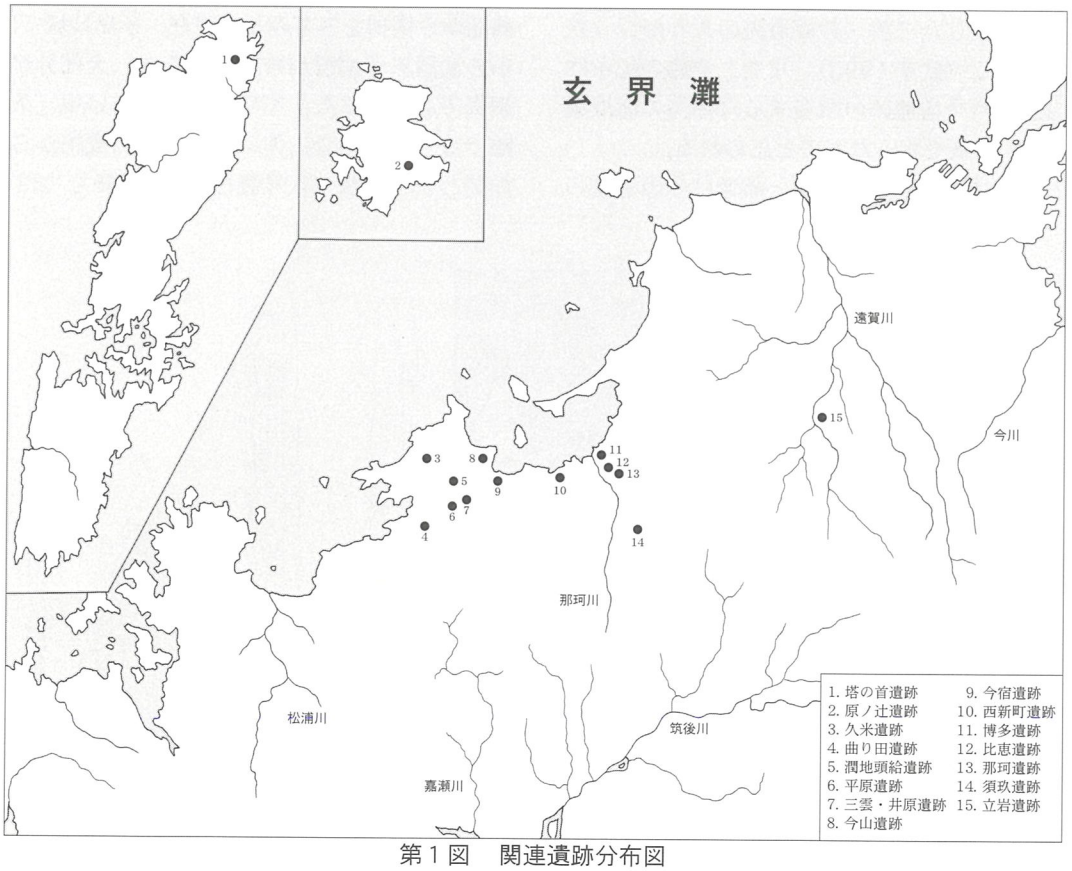
Ⅱ　生産・流通の時期的変遷

1．糸島地域

糸島地域で行われる生産活動は大きく5段階に分かれる。その変遷は前稿で簡単に述べたが（平尾2005)、本稿では少し詳しく振り返る。

第1段階～自家消費的生産活動（弥生時代早～前期）

弥生時代は朝鮮半島から稲作農耕文化を受容し始まるが、それに伴い支石墓に代表される墓制も同様に受容される。糸島地域では井田用会支石墓（柳田1983)、三雲石ヶ崎支石墓（原田1952）や長野宮ノ前遺跡（岡部編1989）のように碧玉製管玉や柳葉形磨製石鏃を副葬するものがあり、上石も大きいものが多い。これら副葬品の大部分は搬入品と思われるが、曲り田遺跡の柳葉形磨製石鏃未製品の存在から、当地域での生産も併行していたと推測される（橋口編1984・1986)。また、系譜関係は不明ながらも、大坪遺跡13号甕棺墓の蓋に扉材が転用された事例から、掘立柱建物も弥生時代前期から存在したことが明らかとなった（橋口編1995)。このような建築材や木製品の加工は基本的に消費地の近くで行ったと想定される



第1図　関連遺跡分布図

が、現在のところ当地域で木製品の貯蔵等が認められるのは弥生時代中期後半～後期前半の上鑵子遺跡のみである。

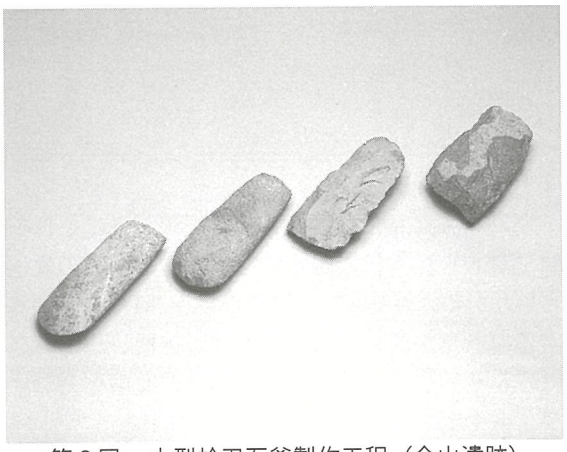
このように第１段階は自家消費的な生産が中心である。

第２段階～石斧の生産と配布（弥生時代前期末～中期前半）

糸島半島の東部に所在する今山遺跡は標高80ｍを測る全体が玄武岩でできた山である。今山遺跡では弥生時代前期初頭から太型蛤刃石斧の生産が始められ、前期末～中期前半にかけて生産量が飛躍的に増加する。太型蛤刃石斧は大陸系磨製石器の一種で、長さ20㎝、幅７～８㎝、厚さ４～５㎝、重さ約1.5kgを測る玄武岩製の重厚な石斧である（第２図）。主に、伐採用の斧として使用され、今山遺跡では原石採取から粗割・打裂・敲打（・研磨）まで一貫した工程が追える。このことから専業工人による石斧生産が想定され、その分布範囲は北部九州全域に広がる。

このように今山遺跡で生産された石斧は広域に分布する一大ブランド品であったが、石斧の生産や流通の管理は工人自らではなく、のちの伊都国の首長が存在した三雲・井原遺跡の人々が行ったと考えられる（武末1993）。また、実際の配布には今山遺跡や今宿遺跡の所在する今津湾の海浜集落の人々が一翼を担ったものと思われる。

このように第２段階の生産と流通は今山遺跡の

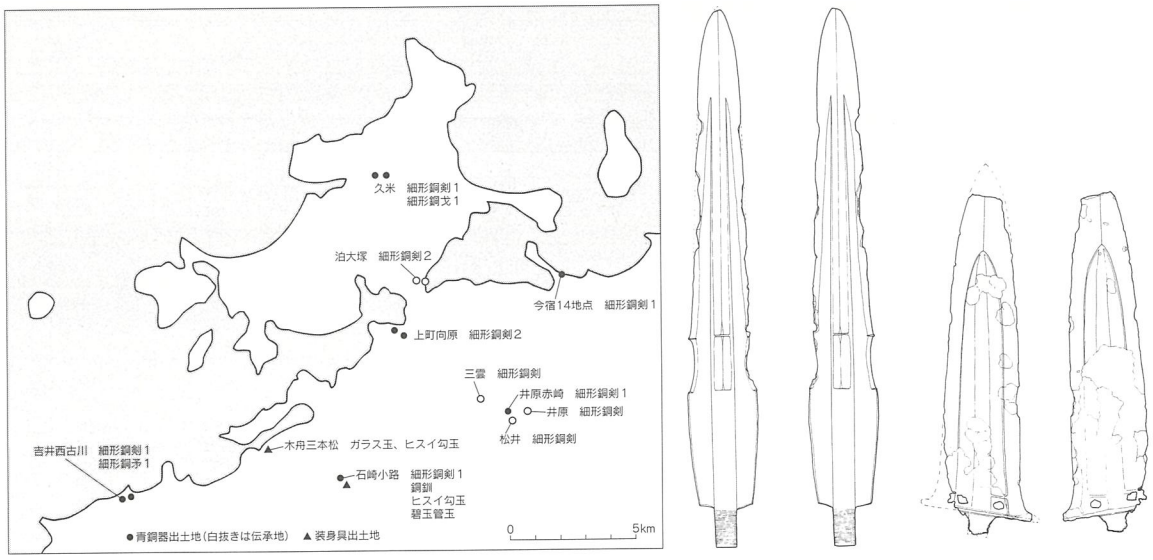


第２図　太型蛤刃石斧製作工程（今山遺跡）

石斧生産に代表されるように、石材産出地の付近で、森林伐採や木材加工のための生活必需品を一貫生産し、製品の流通を集中管理することが特徴である。また、今山遺跡のような集中的な石器生産は立岩遺跡や高槻遺跡でもみられる。

第３段階～銅鏡の輸入と配布（弥生時代中期後半）

弥生時代前期末から中期前半は武器形青銅器の流入・生産が始まる。しかし、糸島地域では鋳型などの青銅器の生産を示す遺物は認められず、副葬品から様相をみてみる。現在、糸島地域では14本の武器形青銅器が確認されるが、大部分が細形銅剣である。また、不時発見例が多い中、久米遺跡では、発掘調査に伴い中期初頭の甕棺から細形銅剣と管玉６個（６号甕棺）・細形銅戈（23号甕



第３図　弥生時代中期前半の副葬品を持つ墳墓の分布と細形銅剣・銅戈（久米遺跡）

棺）が出土した（第３図）（河合編 1999）。現在は吉武高木遺跡３号木棺墓のように集中して武器形青銅器を副葬する墳墓は未確認だが、三雲・井原遺跡で不時発見ながらも４本の細形銅剣が確認されており、そのような墳墓の存在も想定される。

中期後半になると、突出した内容の副葬品を持つ厚葬墓が出現する。三雲南小路遺跡では周囲を幅４m前後の周溝に囲まれた 32 m× 31 mの墳丘の中に、２つの大型甕棺が納められていた。１号甕棺は江戸時代に発見され、『柳園古器略考』に詳細が記される。その後、1975 年の発掘調査で全容が明らかになり、２号甕棺も確認された（柳田編 1985）。１号甕棺からは漢鏡Ⅱ期の大型鏡と漢鏡Ⅲ期の連弧文銘帯鏡を中心とする中型鏡あわせて 35 面出土した。他にも金銅四葉座飾金具８個・ガラス璧８面などの中国製の品々が認められる。また、ほかに棺内から細形銅矛１本　中細形銅矛１本・ガラス製の勾玉・管玉が出土し、棺外から有柄中細形銅剣１本と中細銅戈１本、朱入小壺１個が出土した。２号甕棺からは漢鏡Ⅲ期の小型鏡 22 面を中心に翡翠勾玉１個・ガラス璧転用垂飾１個・ガラス勾玉 12 個が出土した。

その後の前原市教育委員会の調査では周溝から石杵と朱を入れた鉢が出土し、江戸時代に発見された朱入小壺との関連性が注目される（岡部・牟田編 2002）。

このように三雲南小路遺跡１号・２号甕棺は、大型の甕棺に銅鏡を中心とした豊富な副葬品を納め、周溝をもつ墳丘に葬られることから、糸島地域を治めた伊都国の首長墓＝王墓といえる。

副葬品は①原材料採取から製品加工まで中国で行われたもの（前漢鏡・ガラス璧・金銅四葉座飾金具…中国製威信財）②原材料は輸入し、製品加工を北部九州で行ったもの（ガラス製勾玉・管玉・武器形青銅器…日本製威信財）の二種類に分けられる。特に①の中国製威信財は須玖岡本遺跡Ｄ地点甕棺のように地域を治めた奴国の首長の墳墓にみられるなど限定された階層に配布された品々である。しかし、糸島地域では今山遺跡の石斧生産以降、佐賀平野で確認される青銅器の鋳型など生産工房につながる遺物は確認されず、生産力の向上や威信財の生産の結果、中国製威信財を大量に入手できたとは考えられない。逆に弥生時代前期末から中期前半の石斧生産・流通を三雲・井原遺跡の首長が管理する過程で、北部九州全域に糸島地域を中心とする物流のネットワークを形成し、それを紀元前 108 年に朝鮮半島西北部に設置された楽浪郡にまで延ばした結果であると考える。

また、副葬品の構成の差から三雲南小路遺跡の１号甕棺を王墓、２号甕棺を王妃の墓とする意見もあるが、仮にそうであるならば、このころ夫婦合葬墓が出現した楽浪の墓制の影響を受けたともいえる。

このように第３段階の生産活動は明らかではないが、前代に築いた物流のネットワークを拡大したことで、楽浪郡を介して前漢王朝に朝貢するにまで至り、銅鏡をはじめとする中国製威信財を独占的に入手し、限定された首長に配布した時期といえる。

第４図　平原１号墓全体図と墓壙内副葬品配置図

第５図　潤地頭給遺跡出土碧玉・水晶玉未製品

第４段階～青銅器の生産（弥生時代後期）

糸島地域では弥生時代後期から武器形青銅器の生産が確認される。三雲・井原遺跡では出土状況が不明だが、広形銅矛鋳型片２個・完形の広形銅戈鋳型１個が確認され、青銅器生産の中心と思われる。また、曲り田遺跡からは発掘調査に伴い、広形銅矛の鋳型が出土したが（橋口 1994）、包含層からの出土で時期の特定は難しく、糸島地域での青銅器生産の様相は明らかではない。

しかし、中期後半に出現した王墓は後期に入っても引き続き築かれる。井原鑓溝遺跡は江戸時代に発見され、出土品・所在地ともに不明だが、出土遺物の図が残され、壺から漢鏡Ⅳ期の銅鏡21面・刀剣・巴形銅器３個・鎧の板のごときものが出土したことが記される。

その後、三雲・井原遺跡の西にある曽根丘陵には平原１号墓が築かれる。平原１号墓は14.0ｍ×10.5ｍの長方形プランの墳丘墓で周囲に幅約２ｍの溝をめぐらせるが、東南隅が一部途切れ、墓への出入口となる。主体部は墳丘の東北寄りに設けられ、4.6ｍ×3.5ｍの墓壙に長さ３ｍの割竹形木棺を納める（第４図）。副葬品は墓壙の四隅と棺内から多量に出土し、直径46.5㎝を測る超大型の仿製内行花文鏡５面を代表とする計40面の銅鏡を中心に多数のガラス玉類・瑪瑙管玉12個・耳璫２個・素環頭大刀１本からなる。これら副葬品の大半は中国や朝鮮半島からの舶載品で、前代から引き続き、中国製威信財を入手していたと考えられる。また、当時は舶載鏡を権威の象徴としていたが、平原１号墓例のような超大型の銅鏡は、祭祀具として大型化した武器形青銅器とは異なり、威信財として扱われ、舶載鏡をもとに倭人独自の威信財を創出したものといえる。

このように第４段階は北部九州で祭祀に用いられた広形銅矛などの武器形青銅器の生産を始めるとともに、引き続き舶載鏡などの中国製威信財を入手していた。また、新たな倭人独自の威信財を創出した時期といえる。

第５段階～玉類と塩の生産と流通（弥生時代終末～古墳時代初頭）

弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけて糸島地域の生産活動の様相は従来、不明確であったが、潤地頭給遺跡の玉作り工房の調査により、その一端が明らかにされた（江野編 2005）。概報によると潤地頭給遺跡は糸島半島中央部の標高３～４ｍの微丘陵地に所在する。当時は東から今津湾、西から加布里湾が大きく湾入しており、海岸線に程近い場所に遺跡が形成されている。三雲・井原遺跡からは北に約４㎞のところに所在し、まさに糸島半島のクビレに位置する。

工房群は両側を深い谷に挟まれた微高地上の東西80ｍ、南北130ｍの範囲で確認された。工房は竪穴住居の形態をとり、平面は長方形もしくは歪んだ長方形を呈する。屋外には工房を囲むように円形の排水溝が掘られ、それが谷に注ぎ込む。谷の近くには井戸を設ける。工房や廃棄土坑からは砥石や叩き石・鉄錐などの工具が出土している。工房群からは碧玉・水晶・蛇紋岩・瑪瑙・鉄石英の破片が出土するが、碧玉と水晶が多く見られる（第５図）。また、未製品から碧玉は管玉、水晶は丸玉・小玉・算盤玉、蛇紋岩からは勾玉を作り出している。石材の産出地については、碧玉が山陰

地方からの搬入の可能性が高い。また、水晶は産地同定が難しく、糸島地域でも産出する場所があるため資料調査が必要である。

潤地頭給遺跡の玉作りの特徴として、剥片が山陰地方などの碧玉原産地付近の玉作り遺跡と比べて著しく少ないことが挙げられるが、これらは、搬入する原石を選択する段階で、不必要な質の悪い箇所を除去した結果と思われる。今後は、潤地頭給遺跡で生産された玉類がどこに搬出されたのか、朝鮮半島も視野に入れつつ検討する必要がある。

また、古墳時代初頭には備讃瀬戸内地域の影響を受け、脚台付製塩土器を用いた塩の生産が始まる（山崎 1994）。製塩土器は博多湾沿岸・周防灘北岸・大分平野とその内陸部から確認されるが、大部分は１遺構から１～数点のみの出土である。一方、実際に塩を生産した根拠となる製塩土器の大量出土は、博多湾の西の今津湾岸に位置する今宿遺跡（久住・池田編 2000）と今山遺跡（米倉編 2005）のみ確認されており、両者は北部九州最大規模の土器製塩遺跡といえる（第６図）（平尾 2004）。

第５段階は潤地頭給遺跡でみられるように、大規模な玉作り工房群を形成し、玉作りの技術が山陰地方のものに類似することから、山陰の工人とともに不必要箇所を除去した碧玉原石を搬入し、玉類を生産したことが考えられる。製品の供給先は現在不明であるが、弥生時代中期以降、形成されたネットワークが活かされたことは容易に想定できる。また、古墳時代に入ると、今津湾沿岸で土器製塩を開始し、博多湾沿岸地域に供給された。このように弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけて生活必需品である塩の生産を行いながら、地元から産出しない原材料を用いた玉類の生産を一時期併行している。

２．福岡平野と春日丘陵

第１段階～自家消費的生産（弥生時代前期～中期前半）

板付遺跡や那珂遺跡などの初期農耕集落の水田は朝鮮半島で完成していた灌漑システムを導入した結果、既に大規模な灌漑施設を伴ったと指摘されている（広瀬 1997）。特に板付遺跡では整った水路や井関・畦畔の存在が明らかとなり、その前段階の那珂遺跡などでは環濠集落も出現する（第７図）。

弥生時代前期中頃～後半に該当する比恵遺跡 20 次調査 12 号貯蔵穴からは藻塩焼製塩の痕跡が確認され（菅波編 1992）、中期前半の姪浜遺跡３次調査 98 号土坑からは、強い二次焼成を受け、器壁の表面が薄く剥離した甕が出土した（長家編 1996）。この甕は海水を煮詰める煎熬段階で用いられ朝鮮系無文土器も伴うことから、初期の土器製塩と朝鮮半島は何らかのつながりがあった可能性がある。このような中期前半段階の土器製塩は日常土器を転用して海水を煮詰め、製塩の規模も小さいことから自家消費的なものと判断される（平尾 2004）。

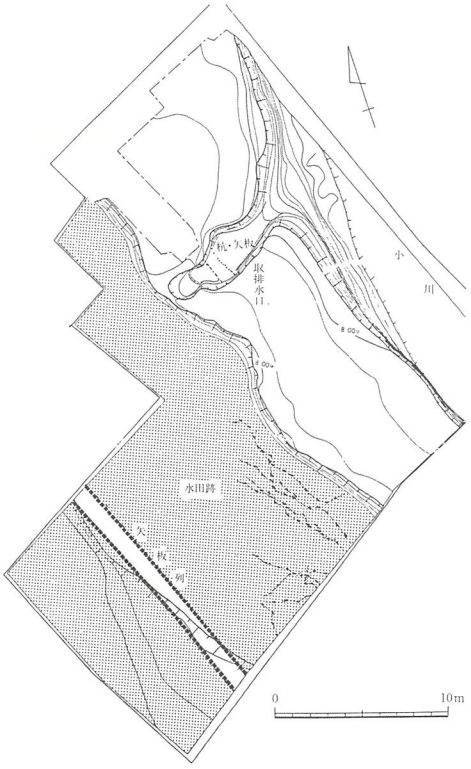
第１段階は弥生時代の始まりとともに環濠集落が出現し、完成された灌漑システムを用いて水田

第６図　製塩土器出土状況（今山８次）と製塩土器実測図（今宿５次）

が営まれた。また、日常土器を用いた土器製塩も始まるが、規模も小さく自家消費的生産が中心の時期といえる。しかし、弥生時代前期末～中期前半にかけて、福岡平野や佐賀平野では朝鮮系無文土器が多く認められ、朝鮮半島南部地域との交流が想定される（後藤 1987・片岡 1996）。甕棺墓への武器形青銅器の副葬も交流を通して伝わり、吉武高木遺跡３号木棺墓や板付田端遺跡のように多鈕細文鏡や複数の武器形青銅器を持つ墳墓も出現する。

第２段階～青銅器生産の始まり（弥生時代中期前半～後半）

朝鮮半島との交流により、弥生時代前期末から武器形青銅器の副葬をはじめた北部九州の人々は、すぐに青銅器の生産に着手する。当初、青銅器の鋳型は朝鮮半島と同じ滑石片岩や滑石岩が用いられたが、後に石英 - 長石斑岩が大部分を占めることから、青銅器生産の開始期は朝鮮半島からの渡来人の下で行われたが、すぐに倭人自らが生産に着手したようだ。これは弥生時代中期前半から、朝鮮半島に例がない三条の節帯をもつ銅矛を生産するなど、倭人の好みに合った青銅器が生産されたことからもわかる。石製鋳型は砥石などに転用される例が多いが、土製中子や坩堝・取瓶・送風管・銅滓などはほとんど転用されないため、青銅器生産工房の存在を示す貴重な資料といえる。石製鋳型や土製中子が出土するのは大きく佐賀平野と福岡平野の２つにまとまる。ここでは福岡平野、とくに春日丘陵で行われた青銅器生産にふれる（第８図）。



第７図　板付遺跡水田址実測図

春日丘陵の青銅器生産は、須玖タカウタ遺跡や須玖坂本遺跡Ｂ地点出土の銅矛中子や銅矛鋳型から中期前半より始まると思われるが、青銅器工房と認定できる最も古いものは中期後半の須玖盤石遺跡である（平田編 2001）。須玖盤石遺跡は春日丘陵の先端部に位置する（第 10 図）。弥生時代中期末の４号住居跡は小型の方形竪穴住居跡で、壁際には側溝が巡り、屋外へと延びる。また、西壁付近の床面からは炭化物が出土し、遺物は石製鋳型２個・銅矛中子３個・鋳型石材片３個など鋳造関係資料が出土したことから、生産工房と考えられる（平田 2004）。

また、この時期から鉄器生産工房も丘陵の西北部から中央部に形成される。中期後半から末の赤井手遺跡 33 号住居跡には鍛冶炉が伴い、多くの鉄片の存在から鍛冶工房と判断される（丸山編 1980）。中期末の仁王手遺跡１号住居跡からも炉が確認され、鉄片や棒状鉄製品が出土しており、赤井手遺跡と同じように鍛冶工房といえる（境編 2004）。

しかし、この時期の鍛冶工房では、鉄製鑿以外は石製工具を用い、加工方法も鑿を用いた成形と砥石を用いた研磨のみで、朝鮮半島の高度な鍛冶技術とは異なる初期的な技術段階に留まる（長家 2002）。

また、弥生中期後半には須玖岡本遺跡Ｄ地点で甕棺墓が発見された。標石をもつ甕棺墓で、棺内から銅鏡 30 面以内・銅矛５本・中細形銅戈１本・銅剣２本以上・ガラス璧片２個・ガラス勾玉１個・ガラス管玉 12 個が出土した。銅鏡 30 面のうち草葉文鏡の３面は漢鏡Ⅱ期の大型鏡、他は星雲文鏡や連弧文鏡を主体とする漢鏡Ⅲ期に含まれる中型鏡・小型鏡である。この甕棺墓は三雲南小路遺跡と同じように多量の銅鏡やガラス璧を含む副葬品を持つことから、この地域を治めた王の墓といえる。

このように第２段階は福岡平野の春日丘陵北部

で青銅器生産が始まる。以後、後期にかけて青銅器・鉄器・ガラス製品を大量に生産するが、原材料の入手経路は不明である。また、青銅器生産の拡大は須玖岡本遺跡Ｄ地点の王墓の出現する時期に近く、大陸と交渉を行い、原材料を入手したという指摘もある（平田 2004）。

第３段階～青銅器・鉄器・ガラス生産の展開（弥生時代後期）

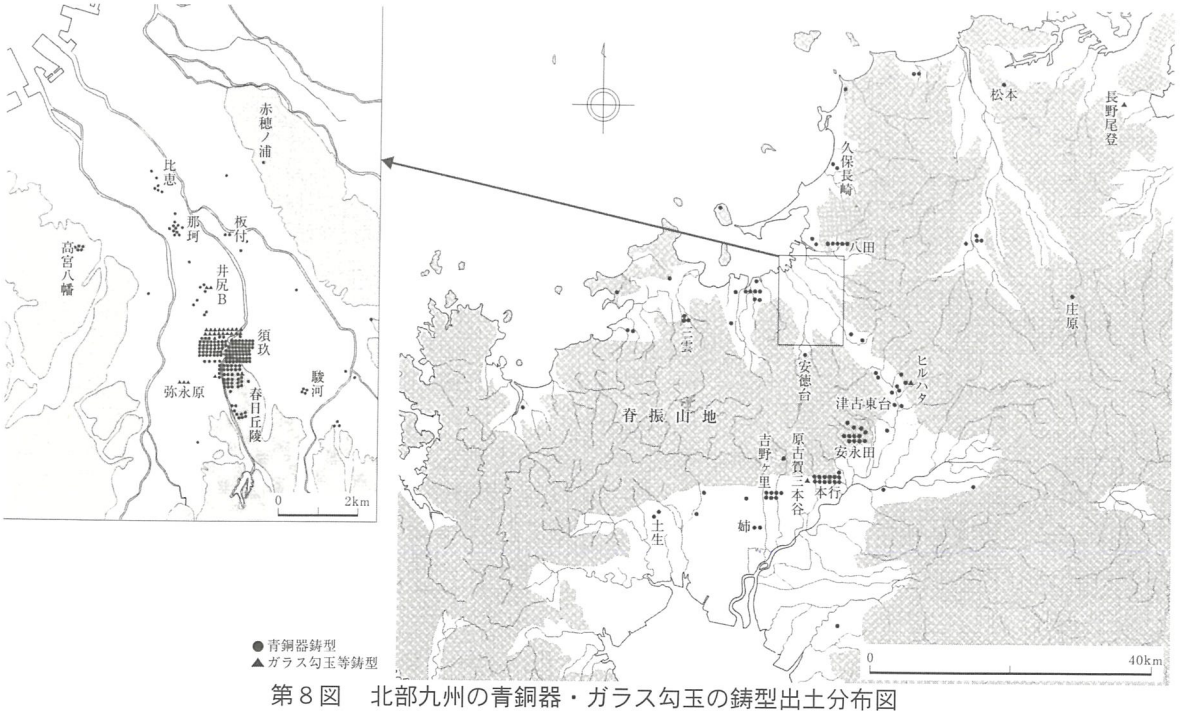
弥生時代後期も前段階から引き続き青銅器の生産が盛んに行われる。須玖永田遺跡や須玖岡本遺跡坂本地区では春日丘陵の北側低地（標高 16 ～ 19m）に工房を移し、周溝に囲まれた掘立柱建物で青銅器を生産する（第 10 図）（丸山編 1987・春日市教育委員会編 1994）。両遺跡からは鋳型や小銅鐸等の中子・坩堝や取瓶・送風管・銅片・銅滓など青銅器生産関連遺物が大量に出土し、中期以上に生産の規模を拡大した。

また、後期になると、ガラス製品の生産も開始する。なかでもガラス勾玉は鋳型を用いることから、生産の様子を知ることができる。ガラス勾玉鋳型は長野尾登遺跡とヒルハタ遺跡・原古賀三本谷遺跡・西新町遺跡例を除くとすべて春日丘陵とその周辺で確認される。特に須玖五反田遺跡１次調査１号住居跡からは勾玉鋳型・丸玉鋳型・ガラスが付着した容器片・ガラス片・砥石などが出土し工房跡と考えられる（第９図）（吉田編 1994）。しかも遺跡の立地が春日丘陵の北側低地で、青銅器工房を持つ須玖永田遺跡や須玖岡本遺跡坂本地区などに隣接し、工房自身も屋外土坑へと延びる溝を付設する点など両者共通するところが多く、青銅器とガラス製品は同じ工房で生産されたと考えられる（平田 2004）。

このように、第３段階は福岡平野南部の春日丘陵の北側低地で、大規模に青銅器やガラス製品を生産しており、弥生時代最大級の工房群を形成している。しかし、中期後半の須玖岡本遺跡Ｄ地点に継続する銅鏡など多量の副葬品をもつ墳墓は未確認である。

第４段階～西新町遺跡の成立（弥生時代終末～古墳時代初頭）

弥生時代も終わりになると福岡平野では博多湾沿岸の集落が大規模化し、半島系土器の出土例が増えてくる。また、前代まで青銅器・ガラス製品生産の中心であった須玖岡本遺跡が衰退し、その北に位置する比恵・那珂遺跡群が成長してくる。この時期、比恵・那珂遺跡群ではいち早く庄内系土器を受容し、筑前型庄内甕を創出するなど、久住氏の表現を借りると「畿内ヤマトの飛地的展開」を示す（久住 2004）。他にも飯蛸壺や製塩土器も弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけて博多湾



第８図　北部九州の青銅器・ガラス勾玉の鋳型出土分布図

沿岸を中心に出土する（平尾2003・2004）。

弥生時代終末期からは西新町遺跡で集落が形成され始める。西新町遺跡では畿内系・山陰系・吉備系などの外来系土器とともに、朝鮮半島南部産の土器やその影響を受けた土器が多量に出土し、造付け竈を持つ竪穴住居跡が数多く認められることから、朝鮮半島や西日本各地を結ぶ中継地としての役割を果たした。この西新町遺跡では勾玉や小玉の土製鋳型や凝灰質泥岩の勾玉未製品、碧玉原石片が確認され、規模は不明ながら各種玉類の生産が認められる。特に小玉の鋳型は韓国全羅南道郡谷里遺跡や京畿道渼沙里遺跡出土例と類似し、鋳造技術等の導入が想定される（重藤編2000）。なお、多量の飯蛸壺や石錘などの漁撈具の出土も特記できる。

また、博多遺跡59・65次調査では鉄滓が融着した断面蒲鉾状の羽口と小鉄片・粒状滓・鍛造剥片・椀形鍛冶滓が出土した（山口編1993・小畑・佐藤1993）。特に羽口の存在は高温操業の根拠となり、前代までの鑿切加工と砥石で研磨を施す段階から、技術が飛躍的に向上したといえる。また、断面蒲鉾形の羽口は韓国江原道安仁里遺跡に類例あり、朝鮮半島から伝来した技術である（村上1997）。

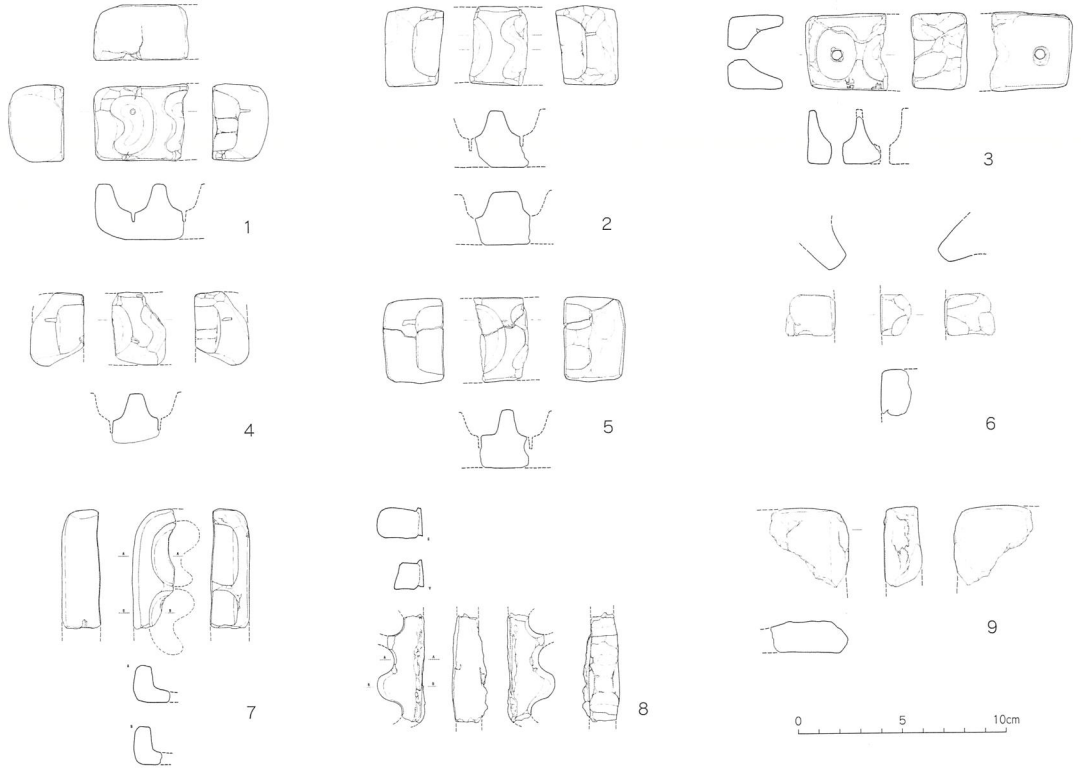
このように、第4段階は西新町遺跡の成立により、博多湾沿岸に大きな交流の拠点が確立し、朝鮮半島と西日本を結ぶ役割を果たした。そのなかで造付け竈や新しい鍛造技術などが博多湾沿岸に導入されるが、この段階では広く普及せず一過性のものであった。

Ⅲ．考察

1．生産遺構の立地とその変遷

上述したように、伊都国にあたる糸島地域では弥生時代前期末から古墳時代初頭にかけて生産と流通の変遷をたどることができる。それは奴国に該当する福岡平野と春日丘陵地域でも同様で、両地域では王墓とされる厚葬墓もほぼ同じ時期に出現する。それらの変遷を簡潔にまとめたものが第11図である。

これによると、弥生時代前期末に今山遺跡で太型蛤刃石斧の大量生産が始まることから、まず、糸島地域で分業が始まる。その後、後期に到るまで、広域に流通する製品の生産工房は認められず、大きな断絶があるといえる。後期の青銅器生産は、



第9図　須玖五反田遺跡出土ガラス製品鋳型

広形銅矛・銅戈の鋳型が拠点集落の三雲・井原遺跡で出土するが、工房跡などは未確認で、具体的な様相は明らかではない。また、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて碧玉・水晶を中心とした玉作りと土器製塩が沿岸部で認められる。

糸島地域では時代により生産するものが変化し（石斧→（不明）→青銅器→碧玉・水晶製玉類、塩）、その生産工房も変遷する特徴をもつ（今山→（不明）→三雲→潤地頭給・今山・今宿）。

一方、春日丘陵では若干遅れて分業が始まる。中期前半から石製鋳型が出土し、青銅器生産を開始するが、青銅器工房は中期末の須玖盤石遺跡が最も古く、後期に入るとガラス製品工房も確認される。両者は隣接して工房を構え、ガラス製品工房から青銅器生産関連遺物が出土することや、一つの鋳型で青銅器と勾玉を作るものがヒルハタ遺跡で認められることから同一工人が生産に携わったと想定される（平田 2004）。また、中期末から鍛冶工房も確認されるなど、春日丘陵北部と北側低地では弥生時代終末期まで一貫して生産工房が認められる。その後、比恵・那珂遺跡や博多遺跡・西新町遺跡などの博多湾沿岸部に拠点が移転する。

2．伊都国・奴国の生産の特徴

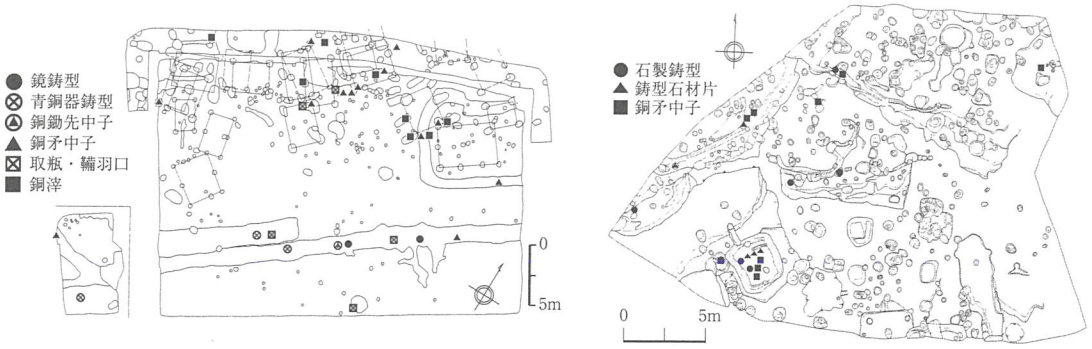
このように両者を比較するといくつかの共通点が認められる。まず、第1に青銅器生産が拠点集落の縁辺部で行われることである（弥生時代中期～後期）。春日北部丘陵と北側低地における青銅器生産の集中は、かねてより指摘されている（平田 2004）。また、出土状況は不明だが伊都国の中心的拠点集落の三雲・井原遺跡でも鋳型が数点出土し、生産の規模や集中度は不鮮明だが、広形銅矛や銅戈が生産された。この特徴は北部九州だけでなく、畿内の唐古・鍵遺跡などでも認められる。

2点目の共通点は生産拠点の移動である。弥生時代中期～後期にかけて、それぞれの地域の拠点集落縁辺部で青銅器生産（ガラス生産も含む）が行われたが、弥生時代終末～古墳時代初頭にかけて生産遺跡が沿岸部に進出する傾向がみられる。糸島地域では今山遺跡（塩）・今宿遺跡（塩）・潤地頭給遺跡（玉）などで、福岡平野では博多遺跡（玉・鉄）・西新町遺跡（玉・ガラス玉）などである。もちろん、今山・今宿遺跡で見られる製塩は、原料となる海水の採取が容易なところで行うのが当然といえるが、そのほかの鉄生産などは従来、若干内陸の拠点集落で行われた。また潤地頭給遺跡や博多遺跡の玉生産の原材料となる碧玉は島根県花仙山産と考えられる。両者は花仙山周辺の玉作り遺跡での碧玉の使用開始とほぼ同時に用いだされ（江野編 2005）、北部九州で形成されたネットワークが山陰地方まで伸びていた証拠ともいえる。

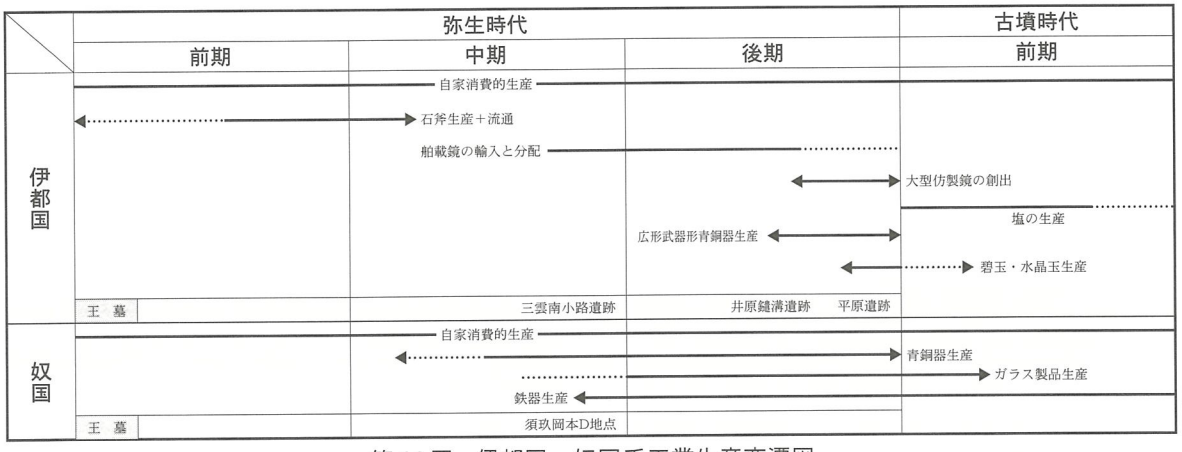
3．潤地頭給遺跡と西新町遺跡

特に弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて沿岸部に進出する工房を伴う集落ではもうひとつの共通点が認められる。それは井戸の存在である（第12図）。

潤地頭給遺跡ではII区東側谷部付近で井戸枠が良好に残る井戸が確認された。概報によると井戸の掘り方は4.0 m× 3.3 mの楕円形に近い形を呈する。井戸は直径60 cm、深さ約2 mを測り、井戸枠



第10図　須玖永田（左）・須玖盤石（右）・遺跡遺構配置図



第11図　伊都国・奴国手工業生産変遷図

は準構造船を転用した6枚の部材を組み合わせたもので、西側から圧力を受け、内部に折れ曲がった状態で確認された。井戸枠内の底部には砂利を敷き、底部近くに約20個体の土器が出土した。報告者は弥生時代後期後葉から終末に位置づける（江野編2005）。なお、潤地頭給遺跡のすぐ東には雷山川が北に向かって流れ、生活用水には事欠かないことから、生活用水の確保とは別の意味を持った井戸であると考える。

弥生時代の井戸を分析し、その出現期には青銅器などの手工業生産との関連性が高いと指摘した堀大介氏は井戸が手工業生産に伴うのは①青銅器・ガラスなどの鋳造、②製塩、③製陶の3つの場合を指摘する（堀1999a・b）。しかし、潤地頭給遺跡の井戸はいずれにも該当せず、玉作りに伴う井戸と判断できる。潤地頭給遺跡の碧玉を用いた玉作りは山陰地方との強い関連性が指摘されるが、現在のところ山陰地方では玉作りに伴う井戸は未確認である。

このことから、碧玉の加工技術や工房の形態、搬出用に加工された碧玉の原石などは、工人等の移動に伴い山陰地方から導入されたが、彼らの受け入れや工房を営む場所の選地・提供、井戸の設置などは地域を治める首長の意向に沿う形で行われ、基本的には首長により工房群全体の管理も行われたと考える。

一方、西新町遺跡には住居跡に造付け竈を伴うものが多く、半島系土器も多く出土する。また、北部九州で製作された畿内系土器や山陰系土器もみられ、多くの飯蛸壺や脚台付製塩土器も出土することから武末純一氏は西新町遺跡を加耶や百済系の渡来人と畿内・山陰・北部九州系の人々が混在する国際交流港ととらえる（武末2004）。

西新町遺跡では3箇所で井戸が確認された（12～14次）。その中でも遺跡の西南部の井戸は保存状態も良好であった（岡寺編2005）。平面プランは長軸24.0m、短軸14.9mを測る南北に長い隅丸長方形を呈し、その南側に井筒にあたる井戸中央ピットを設ける。この井戸の水の状態は記載されていないが、より海に近い遺跡の北側で確認された井戸では真水と確認された（吉田編2003）。西新町遺跡では住居跡の床面ピットの中から凝灰質泥岩の玉原石・未製品が出土したほか、ガラス勾玉・小玉の鋳型も出土している（重藤編2001・吉田編2003）、また、碧玉製玉未製品が12次・14次調査で出土している（重藤編2001・岡寺編2005）。これらから、西新町遺跡の井戸が手工業生産に伴う可能性も否定できないが、遺跡の立地と住居跡の密集度、それに対する碧玉や凝灰質泥岩の出土の少なさから、生活用水確保のための井戸とするのが適当であろう。

ただ、国際交流港とされる西新町遺跡も、在地の首長の判断で渡来人を受容する場所として設定されたものと考える。そのような視点にたつと、造付け竈受容の一過性なども、首長層の意向が反映された結果の可能性がある[註1]。

Ⅳ．おわりに―北部九州手工業生産分業体制―

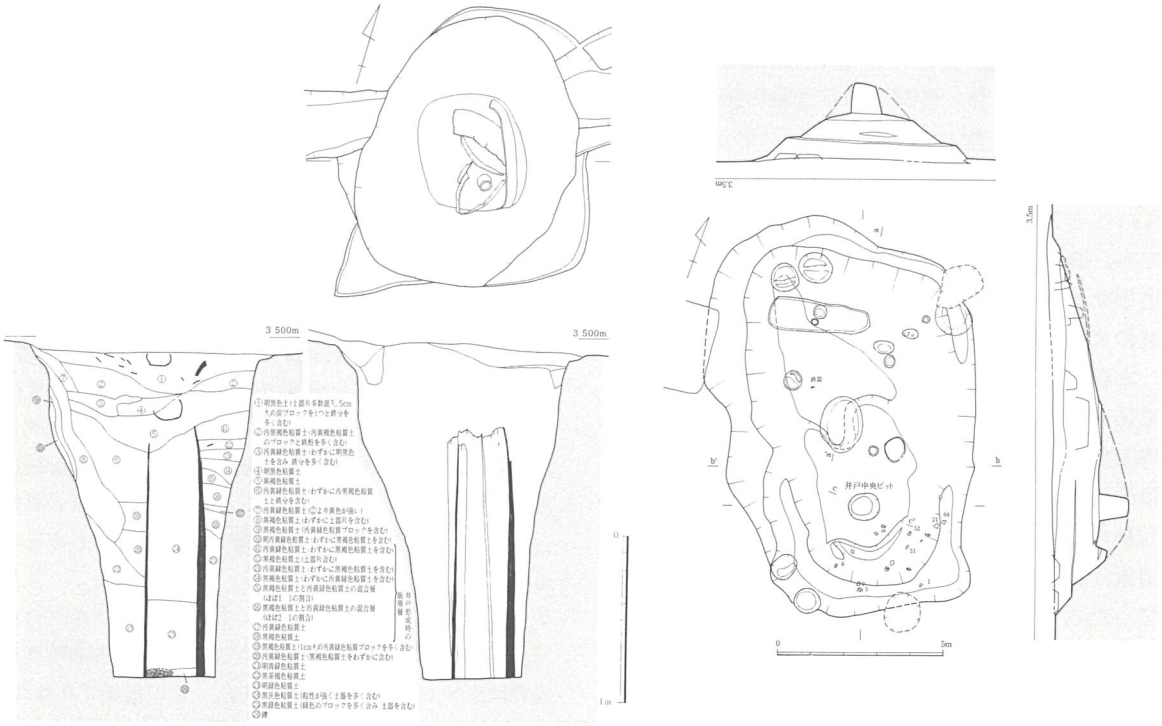
以上のように、伊都国と奴国における手工業生

産を振り返り、共通点と相違点を抽出した。これを最近、提唱されている弥生時代～古墳時代初頭の貿易体制論と比較してまとめとしたい。

弥生時代の貿易体制について、白井克也氏は朝鮮半島との貿易拠点の変遷から勒島貿易（弥生時代中期前半）→原の辻貿易（中期後半～終末）→博多湾貿易（古墳時代前期）と変化することを指摘した（白井 2001）。また、久住猛雄氏は原の辻遺跡に糸島系土器が多くみられることや楽浪系土器の分布から、原の辻貿易には伊都国の王が関与していたとし、原の辻＝三雲貿易と呼ぶことを提唱した（久住 2004）。久住氏によると勒島貿易（弥生時代中期前半～中期末）→原の辻＝三雲貿易（中期末～古墳時代初頭）→前期博多湾貿易（前期前半）→後期博多湾貿易（前期中頃）→金海貿易（前期後半～末）と変遷する註2。

特に弥生時代後期を中心とした時期、つまり、白井氏の原の辻貿易期、久住氏の原の辻＝三雲貿易期は、いずれも三雲・井原遺跡を中心とする伊都国の強い影響の存在が指摘されるが、この時期の三雲・井原遺跡では、調査の限定性もあるが先述したように大規模な生産工房は確認されていない。一方、奴国では広形銅矛の生産を中心とした大規模な青銅器生産が行われ、それらの生産工房は「王直轄の官営工房」とも評されるが（境 2005 他）、弥生時代中期後半の須玖岡本遺跡Ｄ地点以降、王墓は確認されていない。このような状況からみると、弥生時代中期後半から後期後半の北部九州では、青銅器の生産と流通は奴国と伊都国で分担されたと考えられる。

以前、藤間生大氏は伊都国主導の共同体分業論を展開したが註3（藤間 1970）、それをうけて小田富士雄氏は北部九州の国々からなる初期筑紫連合体制が形成され（小田 1987）、「外交関係は伊都国が、北部九州周辺のマツリに配布される銅矛の生産は奴国が主管する体制が確立」したと指摘する（小田 2005）註4。先に述べた伊都国と奴国の青銅器生産量の違いは、このような体制下における分



第 12 図　井戸実測図（左：潤地頭給　　右：西新町 14 次）

業の一環と捉えることも可能で、伊都国の流通重視の姿勢は今山遺跡の石斧生産・配布の段階からの傾向である。したがって、弥生時代中期後半～後期後半こそ北部九州での分業が確立し、連合体制もよく機能した時期と捉えられる。

また、生産と流通の分業が確立したことにより、従来指摘されていた奴国による広形銅矛の配布や鉄・青銅（銅・鉛・錫）などの入手は伊都国を介して行われた可能性が指摘できる[註5]。このような伊都国を束ねた王は中村友博氏が想定した「貿易王」的な性格も兼ね備えた首長であると考える（中村2002）[註6]。

しかし、このように安定していた北部九州手工業分業生産体制も弥生時代終末期になると一変する。潤地頭給遺跡の成立の頃である。

以前、潤地頭給遺跡については「伊都国の官営工房的様相が強い」と指摘したが（平尾2005）、伊都国の主導による原の辻貿易（原の辻＝三雲貿易）体制が解体し、対外交流の拠点が東の博多湾岸に移転するという社会の変動期を解明する鍵を握るのがこの遺跡といえる。したがって、この遺跡の成立・展開・終焉には大きな意味が含まれる。

つまり、北部九州や畿内などそれぞれの小地域で形成された個別の弥生社会が圧縮され、西日本全体としての社会＝倭国という意識の強化により、前方後円墳を表象とする統一的シンボルが創出された時からが古墳時代と考えることができるならば[註7]、本来、製品のみの流通であった玉類に関しても、弥生社会間の流通から倭国内の流通へと変化した結果、搬入用に加工された原石など素材段階の広域流通が可能になったものと考える[註8]。

本稿では、弥生時代から古墳時代初頭の生産と流通の変遷を概観し、画期のひとつが潤地頭給遺跡の成立にあることを指摘した。また、弥生社会間の流通から、倭国内の流通へと変化した結果、列島内の人・モノ・情報の動きが活発化し、その結果、搬入用の碧玉原石の広域流通などが可能になったと指摘した。なお、潤地頭給遺跡の出土品は整理中で、今後、報告書が刊行されていく予定である。遺跡の具体像が明らかにされた段階で再び検討したいと考えている。

（註）

1．反対に前方後円墳という墳墓形態の急速な広がりなどは、各地に広げようとする意向が働いた結果と考える。このほか、食習慣は保守的であるため受容されにくい可能性も指摘されている（上原2005）。

2．本稿では久住氏の了承を得て、原の辻＝三雲貿易と表記する。

3．藤間氏は石庖丁生産・石斧生産・銅利器生産・海運・情報・交易の6部門で行われ、北部九州の国々を結びつける役割を果たしたとするが、小田富士雄氏が指摘するように各部門が盛行した時期に差があり、若干の修正が必要である（小田1987）

4．小田氏は初期筑紫連合体制について述べる中で、連合体制を主導する国を頭につけて奴国連合体制や伊都国連合体制と述べている（小田1987）。従来は王墓とされる厚葬墓が継続して築かれる伊都国が北部九州の中で優位であったとされるが（弥生時代後期）、本稿では生産と流通を分担した結果、連合体制が維持されたとして論をすすめる。しかし、本来は連合体制といえども主導するグループと従属するグループの存在は明らかで、それらの抽出は今後の課題とする。

5．ここで指摘した伊都国の広形銅矛の配布先は主に壱岐・対馬・朝鮮半島という北側方面と考える。東九州や四国は従来どおり奴国による配布が行われたのだろう。なお、これらのことから原の辻貿易（原の辻＝三雲貿易）は伊都国主導といえども、東九州や四国方面には奴国の流通網も整えられていたとする指摘に従う（下條1991）。また、鉄や青銅（銅・鉛・錫）の入手経路について詳細は不明で、伊都国を経由したとするのもひとつの可能性を指摘したものである。

6．中村氏は「北部九州の弥生時代の王は隊商長ないしその組織者である」と指摘するが、「南北市糴」した対馬の広形銅矛などを副葬する石棺墓（塔の首遺跡等）の被葬者が該当すると考える。基本的に伊都国や奴国の王墓とされる墓は各地域で最も広い平野部に形成された拠点集落の中に築かれ、副葬品以外でも一般構成員との隔絶性が認められることから、貿易王そのものとはいえないが、貿易王的要素を多分に含むものと考える。

7．この古墳時代の定義はR．ロバートソンのグローバリゼーション論を参考にした。しかし、古墳時代の成立は東アジア世界（これもまた一つの地域であるが）から見るならば、小地域の成立ともいえ、グローバリゼーションの語義やその成立過程からも分かるように古墳時代の成立をそのままこの概念に当てはめること

はできず、検討が必要であろう。
また、本稿では提示していないが、弥生社会が圧縮する原因の検討も必要である。例えば、白石太一郎氏は原因の一つに「広域の政治連合形成の背景に、朝鮮半島との交易ルートの支配権をめぐる抗争」の存在を指摘する（白石2002）。
８．玉類のほかにも、北部九州への脚台付製塩土器、畿内への鉄器の広がりも倭国内の流通の確立に伴うものと考える。

【参考文献】

上原真人　2005「暮らしぶり」『暮らしと生業』列島の日本史２　岩波書店

江野道和編　2005『潤地頭給遺跡』前原市文化財調査報告書第89集

岡寺未幾編　2005『西新町遺跡Ⅵ』福岡県文化財調査報告書第200集

岡部裕俊編　1989『長野宮ノ前遺跡』前原市文化財調査報告書第31集

岡部裕俊編　1998『王がいた証』伊都歴史資料館

岡部裕俊・牟田華代子編　2002『三雲・井原遺跡Ⅱ』前原市文化財調査報告書第78集

岡村秀典　1984「前漢鏡の編年と様式」『史林』67-5

岡村秀典　1993「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』55

小田富士雄　1987「初期筑紫王権形成史論―中国史書にみえる北部九州の国々―」『東アジアの考古と歴史』中　同朋舎

小田富士雄　2005「『魏志』倭人伝のクニグニ」『別冊太陽』136　平凡社

小畑弘己・佐藤一郎編　1993『博多37』福岡市埋蔵文化財調査報告書第329集

春日市教育委員会編　1994『奴国の首都　須玖岡本遺跡』吉川弘文館

片岡宏二　1996「渡来人と青銅器生産」『古代』102

河合修編　1999『久米遺跡』志摩町文化財調査報告書第21集

河野一隆　2006「水晶製玉類の生産と流通」『季刊考古学』94　弥生・古墳時代の玉文化

久住猛雄・池田祐司編　2000『JR筑肥線複線化地内遺跡埋蔵文化財調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第654集

久住猛雄　1999a「北部九州における庄内並行期の土器様相」『庄内式土器研究』ⅩⅨ

久住猛雄　1999b「弥生時代終末期「道路」の検出」『九州考古学』74

久住猛雄　2000「奴国の遺跡―比恵・那珂遺跡群と須玖・岡本遺跡群」『考古学から見た弁・辰韓と倭』

久住猛雄　2002「九州における前期古墳の成立」『日本考古学協会2002年度橿原大会研究発表資料集』

久住猛雄　2004「古墳時代初頭前後の博多湾岸遺跡群の歴史的意義」『大和王権と渡来人』大阪府立弥生文化博物館

後藤直　1987「朝鮮系無文土器再論」『東アジアの考古と歴史』中　同朋舎

境靖紀編　2004『仁王手遺跡』春日市文化財調査報告書第37集

境靖紀　2005「奴国」『別冊太陽』136　平凡社

重藤輝行編　2000『西新町遺跡Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第154集

重藤輝行　2001「第５章　考察」『西新町遺跡Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第157集

下條信行　1975「北九州における弥生時代の石器生産」『考古学研究』22－1

下條信行　1991「北部九州弥生中期の「国」家間構造と立岩遺跡」『古文化論叢』児嶋隆人先生喜寿記念論集

白井克也　2001「勒島貿易と原ノ辻貿易」『弥生時代の交易』第49回埋蔵文化財研究集会

白石太一郎　2002「倭国誕生」『倭国誕生』日本の時代史１　吉川弘文館

高久健二　1993「楽浪墳墓の編年」『考古学雑誌』78－4

武末純一　1993「交易はどのように行われたか」『新視点日本の歴史』第１巻原始編　新人物往来社

武末純一　2004「伽耶と倭の交流―古墳時代前・中期の土器と集落―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集

寺沢薫 2000『王権誕生』日本の歴史02　講談社

藤間生大　1970『埋もれた金印―日本国家の成立―第二版』岩波新書

中村友博　2002「石器から金属器へ―ヨーロッパとの比較―」『古代を考える　稲・金属・戦争』　吉川弘文館

長家伸　2002「弥生時代の鍛冶技術について」『細形銅剣文化の諸問題』

中山平次郎　1931「今山の石斧製造所址」『福岡県史跡名勝天然記念物調査報告』第６輯

二宮忠司編　1992『福岡市博多区国史跡板付遺跡環境整備報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第314集

橋口達也編　1984『石崎曲り田遺跡Ⅱ』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第９集
橋口達也編　1985『石崎曲り田遺跡Ⅲ』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第11集
橋口達也編　1994『曲り田周辺遺跡Ⅳ』二丈町文化財調査報告書第７集
橋口達也編　1995『大坪遺跡Ⅰ』二丈町文化財調査報告書第10集
原田大六　1952「福岡県石ヶ崎の支石墓を含む原始墓地」『考古学雑誌』38－４
平尾和久　2003「福岡県における飯蛸壷形土器の受容と展開ー西新町遺跡を中心にー」『古文化談叢』50（上）
平尾和久　2004「北部九州の脚台付製塩土器」『福岡大学考古学論集ー小田富士雄先生退職記念ー』
平尾和久　2005「伊都国」『別冊太陽』136　平凡社
平田定幸編　2001『須玖盤石遺跡』春日市文化財調査報告書第29集
平田定幸　2004「青銅器とガラス製品の生産―九州」『考古資料大観』10遺跡・遺構 小学館
広瀬和雄　1997『縄文から弥生への新歴史像』角川書店
堀大介　1999a「井戸の成立とその背景」『古代学研究』146
堀大介　1999b「手工業生産にともなう井戸について」『考古学に学ぶ』
丸山康晴編　1980『赤井手遺跡』春日市文化財調査報告書第６集
丸山康晴編　1987『須玖永田遺跡』春日市文化財調査報告書第18集
村上恭通　1997「原三国・三国時代における鉄技術の研究―日韓技術比較の前提としてー」『青丘学術論集』11
村上恭通　1998『倭人と鉄の考古学』青木書店
柳田康雄　1983「糸島地方の弥生遺物拾遺」『九州考古学』58
柳田康雄編　1985『三雲遺跡　南小路地区編』福岡県文化財調査報告書第69集
柳田康雄　2002『九州弥生文化の研究』学生社
柳田康雄・角浩行編　2000『平原遺跡』前原市文化財調査報告書第70集
山口譲治編　1993『博多36』福岡市埋蔵文化財調査報告書第328集
山崎純男　1994「福岡県」『日本製塩土器研究』　青木書店
吉田東明編　2003『西新町遺跡Ⅴ』福岡県文化財調査報告書第178集
吉田佳広編　1994『須玖五反田遺跡』春日市文化財調査報告書第22集
吉田佳広編　1995『須玖五反田遺跡Ⅱ』春日市文化財調査報告書第24集
吉留秀敏　2004「集落・居館・都市的遺跡と生活用具－九州」『考古資料大観』10遺跡・遺構 小学館
米倉秀紀編　2005『今山遺跡８次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第835集
Ｒ.ロバートソン（阿部美哉訳）　1997『グローバリゼーション』東京大学出版会

図の出典
第３図　岡部編1998、河合編1999を改変
第４図　柳田・角編2000を改変
第６図　米倉編2005、久住・池田編1999を改変
第７図　二宮編1992を改変
第８・10図　平田2004を改変
第９図　吉田編1995を改変
第12図　江野編2004、岡寺編2005を改変

三雲・井原弥生集落の成立と変遷

角　浩行（伊都国歴史博物館）

Ⅰ　はじめに

三雲・井原遺跡が存在する糸島地方には、『魏書』東夷伝倭人条（魏志倭人伝）に登場する伊都国が存在したと考えられている。三雲・井原遺跡には三雲南小路遺跡や井原鑓溝遺跡など伊都国の王墓と考えられる遺跡が存在し、弥生時代から古墳時代にかけて伊都国の中心的な集落と考えられている。これら王墓に関連する論考は古くからみられるが、集落の構造や変遷についてはまとまった発掘調査が行われていないため、これまであまり論じられることはなかった[註1]。しかし、昭和４９年（1974）から始まった福岡県教育委員会の発掘調査や、その後の前原市教育委員会の発掘調査の成果によって、少しずつ遺跡の様相が明らかになってきた。本稿ではいまだ遺跡全体を論じるには資料不足であると思われるが、これまでの成果を整理する意味で三雲・井原遺跡の集落の復原を試みたい。

なお、時期としては弥生時代を対象とし、時期区分は早期（突帯文期）、前期前半（板付Ⅰ式期）、前期後半（板付Ⅱａ～ｂ式期）、前期末～中期初頭（板付Ⅱｃ式～城の越式期）、中期前半（須玖Ⅰ式期）、中期後半（須玖Ⅱ式期）、中期末～後期初頭（須玖Ⅱ式の一部～高三潴式の一部）、後期前半（高三潴式）、後期後半（下大隈式～西新式の一部）、終末期（庄内式並行期）とする[註2]。

Ⅱ　三雲・井原遺跡の立地

遺跡は前原市の東部に広がる平野部に位置し、瑞梅寺川と川原川にはさまれた扇状地に立地している。地形は南側から北側に緩やかに傾斜しており、標高は北側で約１５m、南側で約４０ｍを測り、

第１図　三雲・井原遺跡位置図（1/100,000）

表. 三雲・井原遺跡時期別遺構一覧

	番号	調査区名	時期／遺構	早期（晩期）	前期 前半	前期 後半	前期末～中期初頭	中期 前半	中期 後半	中期末～後期初頭	後期 前半	後期 後半	終末期	報告書
北部	1	郡の後Ⅳ－1～4	住居						2					1
			土坑他		1						2			
			墓地					1						
	2	加賀石Ⅰ－22・23	住居			5	1		2			1		1
			土坑他		1	4	2							
	3	仲田Ⅰ－16	住居						1			0	1	2
			土坑他						2			1	1	
			墓地										1	
	4	加賀石Ⅰ－10	土坑他							1				1
	5	加賀石Ⅰ－9	墓地		8									1
	6	加賀石Ⅰ－1・5	墓地	1									1	1
	7	石橋Ⅰ－2	墓地				7							2
	8	仲田Ⅰ－14	墓地		2	8								2
	9	仲田Ⅰ－6（参考）	谷（包含層）											2
	10	深町－15（参考）	谷（包含層）											2
	A	井田用会	墓地	1										14
	B	井田御子守	墓地	1										
中央部	11	番上Ⅱ－6	住居			1		2	5	1	1	8	1	1
	12	番上Ⅱ－2・3	住居								1			1
			土坑他									1		
	13	仲田Ⅲ－4	住居						5			4		1
	14	サキゾノⅠ－4・5	住居						1		1	0		2
			土坑他									4		
	15	サキゾノⅠ－1	住居								1	2	1	3
	16	サキゾノⅠ－7・8	住居							1	2		2	3
			土坑他							1				
	17	柿木－3	住居					1						1
	18	柿木－11	住居		1									2
			墓地				7							
	19	八反田Ⅱ－6	住居								5			3
	20	八反田Ⅱ－3	住居							1				3
	21	塚廻りⅡ－6	住居										1	3
			土坑他						1		1		1	
	22	中川屋敷Ⅰ－7	土坑他									4		3
	23	中川屋敷Ⅰ－8c	住居										1	3
	24	中川屋敷Ⅰ－9j	住居									1		3
	25	中川屋敷Ⅰ－11q	住居								1			3
			土坑他							3				
	26	中川屋敷Ⅰ－12	住居										1	4
	27	宮ノ下	住居										2	12
	28	堺Ⅰ－2～4	住居							1	1			4
			墓地										3	
	29	屋敷Ⅰ－10	墓地					1						3
	30	石橋Ⅱ－12	墓地										2	2
	31	石橋Ⅱ－8	墓地										1	2
	32	下西Ⅱ－10（参考）	住居跡状遺構						1					3
	33	番上Ⅱ－5（参考）	土器溜											3
	29	屋敷Ⅰ－10	大溝状遺構											3
	30	石橋Ⅱ－12	大溝											2
	34	イフ－3	大溝											3
	35	イフ－7	大溝											3
	C	下西526-1番地他	墓地											※
	D	下西 534番地他	溝											※
	E	中川屋敷480-1番地	住居											※
南部	36	八龍Ⅰ－7	住居										1	4
			墓地										1	
	37	八龍Ⅰ－18	住居		1		1							4
			土坑他		2									
	38	寺口Ⅱ－17	墓地			1						1		4
	39	八龍Ⅱ－10	墓地					17	9	2				4
	40	堺Ⅰ－6～8	墓地									2		4
	41	堺Ⅰ－13	墓地										1	4
	42	堺Ⅱ－27	墓地								1			4
	43	堺Ⅱ－30～32	墓地			1			3	3				4
	44	井原堺D地区	墓地						2	1	3			6・12
	38	寺口Ⅱ－17	大溝1											4
			大溝2											
	45	八龍Ⅰ－3・11、221番地	大溝Ⅰ											4・12
			大溝Ⅱ											
南西部	46	南小路Ⅰ－5～7	住居？								1			5・10・11
			王墓							1				
	47	南小路Ⅰ－9	住居									1		5
	48	南小路Ⅲ－3a・c	住居						1				4	4
	49	南小路Ⅲ－4a	土坑他		1									4
	50	上覚Ⅰ－2	住居								1			4
	51	上覚Ⅰ－6b	住居									1		4
		上覚Ⅰ－6	墓地										1	4
		上覚Ⅰ－6b	墓地										1	4
	52	南小路1264番地	住居								1			11
			土坑他						1					
	53	南小路469番地	住居						1		1			11
	54	ヤリミゾ437番地	住居						1					13
	55	井原ヤリミゾ2575番地	住居							3				13
	56	上覚441番地	住居						3	2	1			13
	57	井原上学	住居							2	1			8・9
			土坑他						3					
			溝	1										
	58	南小路470-2番地	土坑他						3					11
	59	上覚450-2番地	住居						1	1		2	5	7・13
			土坑他						1	1				
	F	ヤリミゾ428番地他	墓地											※
	G	井原ヤリミゾ2582番地他	墓地											※

調査区の番号は地図に対応。報告書欄の番号は文末の一覧番号に対応。
報告書欄の※は2006年3月報告書刊行予定
━━━ この時期の遺構がある（大溝等は存続時期）
◀━━▶ この時期の可能性のある遺構がある
各欄の数字は、遺構の数

遺跡の面積は約６０haと推定される。弥生～古墳時代には遺跡の東西を流れる２つの川は広い氾濫原を形成していたと考えられ、集落は氾濫原から１段高い段丘上に営まれていた。氾濫原からは住居跡や墓地などの遺構は検出されていないが、水田が存在した可能性が考えられる。

Ⅲ　三雲・井原弥生集落の変遷

三雲・井原遺跡の弥生時代の各調査区の遺構の検出状況をまとめたものが表である。これをもとに、各時期の遺構の分布状況を検討した結果、弥生早期～前期後半、前期末～中期前半、中期後半～後期後半、終末期の各時期に集落のあり方に変化が見られる。以下、時期ごとに述べてゆく。また、遺構の分布状況をもとに遺跡を北部、中央部、南部、南西部の４つの区域に区分し記述してゆく。

１．弥生早期～前期後半

弥生時代初期の遺構は遺跡の北部に多く検出されている。郡の後Ⅳ―１～４区から前期前半の土坑が、加賀石Ⅰ―９区、仲田Ⅰ―１４区からは前期前半の甕棺が検出されている。また、早期から前期にかけての支石墓が加賀石Ⅰ―１・５区から検出されている。前期後半になると加賀石Ⅰ―２２・２３区から住居、貯蔵穴が、仲田Ⅰ―１４区からは甕棺、土壙墓が検出されている。

前期後半の状況からみると、加賀石Ⅰ―２２・２３区の居住域の西側に仲田Ⅰ―１４区の墓地が存在する。加賀石、石橋地区の東側は２ｍ程度の段差で低くなり、川原川へと続くため居住域が存在したとは考えにくい。このため居住域の範囲は最大幅７０ｍほどとなる。これに前期前半の墓地の存在を考え合わせると、加賀石の居住区の北側から西側にかけて墓地が存在するという構造が復原できる。また、墓地の中で最も古いものは加賀石Ⅰ―１・５区の支石墓であるが、この支石墓は上石が２ｍ以上と推定される大型のもので、柳葉形磨製石鏃を副葬品に持つことから加賀石集落の長であったと考えられる。

このように弥生前期の集落は、最初は支石墓を中心に形成されたと考えられる（柳田 2002）。三雲・井原遺跡にはこのほかに早期ないし前期前半の井田用会支石墓、井田御子守支石墓が存在する。いずれも上石が２ｍ以上ある大型のもので、井田用会支石墓は３．６ｍ×２．９ｍの日本でも最大と思われるのものであり、副葬品に碧玉製管玉を持つ。これらの支石墓は約７００～５００ｍの間隔で存在し、いずれも周辺にも集落が存在したと考えられ、三雲・井原遺跡の北部に弥生時代の初期に少なくとも３群の集落が存在したと考えられる。

遺跡の中央部では、前期後半の遺構として番上Ⅱ－６区から住居跡が検出されている。柿木１１区からは前期前半の可能性がある住居跡、前期末以前の土壙墓などが検出されている。また、番上Ⅱ－５区からは前期後半から終末期までの土器を含む土器溜りが検出されている。

遺跡の南部では前期後半の遺構として寺口Ⅱ―１７区から甕棺が、堺Ⅱ―２２・２３区から土壙墓が検出されている。また、前期と考えられる遺構は八龍Ⅰ－１８区から住居跡、竪穴が、堺Ⅱ―３０～３２区から土壙墓が検出されている。

遺跡の南西部では井原上学遺跡から早期の溝が検出されており、前期と考えられる遺構として南小路Ⅲ－４区から貯蔵穴が検出されている。

三雲・井原遺跡の早期～前期の様相はまず、遺跡の北部に３ヵ所の集落が存在し、いずれも大型の支石墓を中心としていたと考えられる。また、郡の後Ⅳ―１～４から前期前半の土坑や南西部の井原上学遺跡からは早期の遺構（溝）が検出されており、集落の存在が想定されるが、詳細は不明である。

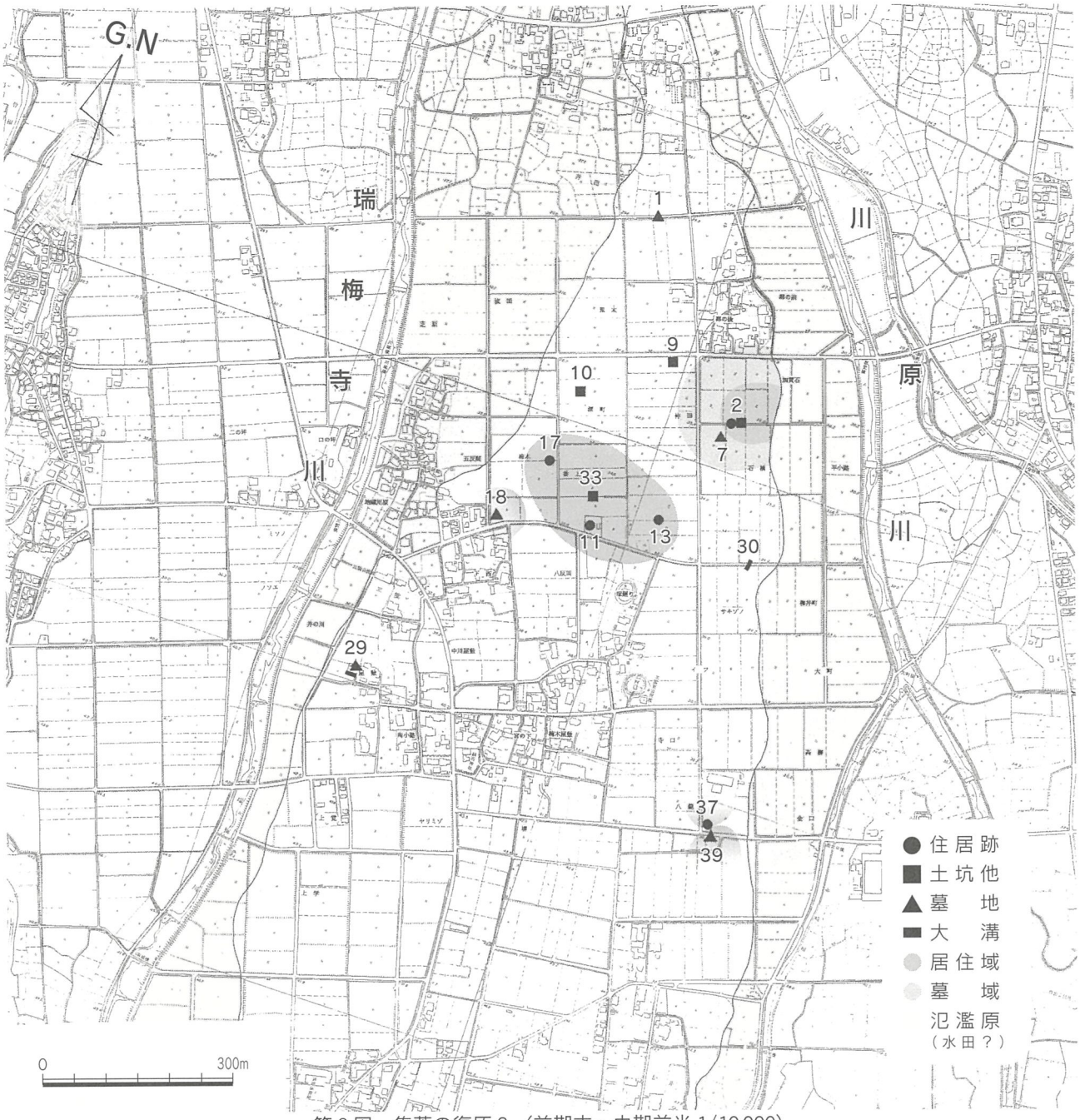
前期後半になると中央部の番上地区に居住域が形成される。墓地は不明であるが、柿木１１区の墓地がこれに対応する可能性が考えられる。また、南部の寺口、堺地区では墓地が形成され、居住域は八龍地区にあったと考えられる。その他、南小路地区にも居住区の存在が考えられる。

以上のようにまず早期から前期前半にかけて遺跡の北部を中心に集落が形成され、前期後半になると遺跡の中央部、南部にも集落が形成され、三雲・井原遺跡内に５ヶ所程度の集落が点在していた状況が想定される。

２．前期末～中期前半

遺跡の北部では前期末～中期初頭の遺構として加賀石Ⅰ―２２・２３区から住居跡、土坑が、石橋Ⅰ―２区から甕棺墓が検出されている。中期前半の遺構としては郡の後Ⅳ―１～４区から甕棺墓と

第２図　集落の復原１（早期～前期後半 1/10,000）



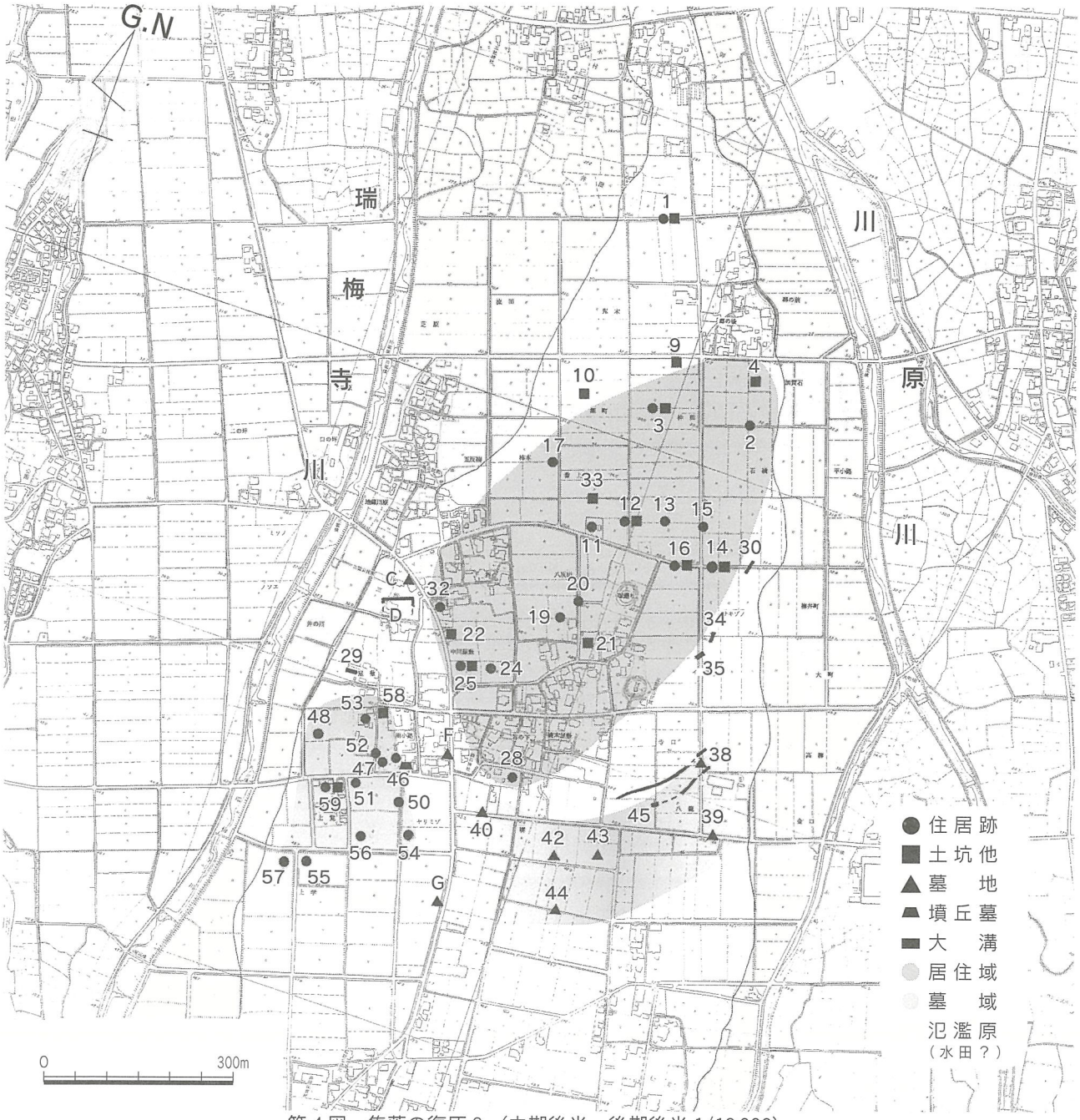
第３図　集落の復原２（前期末～中期前半 1/10,000）

これに伴うと考えられる祭祀土坑が検出されている。また、仲田Ｉ―６区からは中期前半から後期後半までの土器を含む包含層が、深町１５区からは中期前半から終末期までの土器を含む包含層が検出されている。

中央部では柿木１１区から前期末～中期初頭の木棺墓、土壙墓、甕棺墓が検出されている。中期前半の遺構は番上II－６区から住居跡が検出されている。また、中期前半の可能性がある住居跡が柿木３区、仲田Ⅲ－４区から検出されている。中川屋敷Ｉ－７からは中期のものと考えられる土坑が検出されている。南西部の屋敷Ｉ－１０区からは甕棺墓が検出されている。

南部では前期末～中期初頭の遺構として八龍Ｉ－１８区から住居跡が検出されている。中期前半では八龍II－１０区から甕棺墓が、八龍Ｉ－１８区から住居跡が検出されている。また、中期前半の可能性がある住居跡（？）が三雲ヤリミゾ４３７番地から検出されている。

この時期の集落の様相は、北部の加賀石地区、中央部の番上地区、南部の八龍地区では前代からの集落が存続しており、中でも番上地区の集落がやや範囲が広いようで、三雲・井原遺跡内でも中心的な集落であった可能性が考えられる。さらに



第４図　集落の復原３（中期後半～後期後半 1/10,000）

中期前半には加賀石地区も含めた範囲に広がっていた可能性が考えられる。南西部の南小路地区では遺構が検出されておらず、集落が営まれていないようである。また、北部の郡の後Ⅳ―１～４、南西部の屋敷Ⅰ－１０区からも遺構が検出されているが、いずれも甕棺墓１基のみであり詳細は不明である。

以上のようにこの時期の集落は分布としては前代とほとんど変わらず、遺跡内に散在していたようである。前代の集落が引き続き営まれるか、あるいは廃絶されたものもあったのではないかと考えられるが、新しい集落の形成はみられない。

３．中期後半～後期後半

この時期なると集落の様相が大きく変化している。中期後半にはそれまで遺構が検出されていた加賀石、仲田、番上の各地区に加え塚廻りⅡ－６区から土坑、下西Ⅱ－１０区から住居跡（？）が検出されている。また、下西 534 番地からは平面「コ」の字形の溝が検出されている[註3]。下西 526-1 番地他、ヤリミゾ 428 番地他[註4] からは甕棺墓が検出されている。遺跡の北部から中央部にかけては住居跡および土坑など生活関連遺構が主体であることから、この地域全体に居住域が形成されたものと考えられる。さらに中期末～後期初頭に

なると堺Ⅰ－２～４区から住居跡が検出されており、居住域がさらに広がったものと考えられる。この状況は基本的には後期後半まで続き、中期末～後期初頭に形成された居住域の範囲は長さ６５０m、幅３５０mに及ぶものと考えられる[註5]。

また、下西534番地から検出された溝は、幅約２mで断面が「V」字形であり、東西方向に約５４．５mが検出されている。両端ではほぼ直角に南側に曲がっており、平面「コ」の字形となる。中期後半には掘削されており、布留式期には埋没しているとのことである[註3]。南側の調査が行われていないため全体の形は不明であるが、方形に巡る可能性が考えられる。

これに伴い墓地については遺跡の南部に集中するようである。中期後半には八龍Ⅱ－１０区から甕棺墓が、堺Ⅱ―３０～３２区から木棺墓、甕棺墓が、井原堺D地区からは甕棺墓が検出されている。これ以後、後期後半にいたるまでこの地区は墓地遺構のみが検出される。

寺口Ⅱ―１７区、八龍Ⅰ－３・１１区、八龍２２１番地からはそれぞれ大溝が検出されている[註6]。大溝は２条あり、いずれも幅約３m前後、深さ約１mで、断面は逆台形を呈する。これらはその位置関係から見ると、それぞれがつながり２条の並行した大溝であったと考えられる。いずれも中期後半頃に掘削され、布留式の時期には埋没していると考えられる。墓地は現在のところ、この大溝の南側から検出されており、この溝が居住域と墓域を分けていたものと考えられる。

また、石橋Ⅱ－１２区、イフ－３区、イフ―７区でも大溝が検出されている。大溝は幅３～４m、深さ５０～８０cmで、断面は石橋Ⅱ－１２区、イフ－３区が逆台形、イフ―７区が緩い「V」字形を呈する。これらの大溝もその位置関係から見ると１本の大溝あったと考えられるが、石橋Ⅱ－１２区は中期後半、イフ―７区は後期後半、イフ－３区は終末期には埋まっていたようで、石橋地区とイフ地区の大溝が同一ものになるかは確認が必要であろう。今後の調査を待ちたい。

南西部では上覚450-2番地から住居跡、土坑が、南小路470-2番地から土坑が、井原上学遺跡から住居跡が検出されている。また、南小路Ⅲ－３区、井原ヤリミゾ2575番地、三雲ヤリミゾ437番地から中期後半と考えられる住居跡、土坑が検出されている。以後、後期後半まで住居跡、土坑などが検出されており、居住域が形成されているようである。

屋敷Ⅰ－１０区では大溝の一部が検出されており中期後半には埋没しているようである。この大溝は一部が検出されただけで、機能は不明である。

また、屋敷・井ノ川地区からは青銅器の鋳型が出土している。広形銅鉾鋳型片２点と完形の広形銅戈鋳型１点であるが、いずれも発掘調査に伴うものではないため出土状況は不明である。屋敷地区周辺では現在のところ鋳型以外の青銅器生産に関係する遺物や遺構は検出されていないが、後期には青銅器の生産工房が存在した可能性が考えられる[註7]。

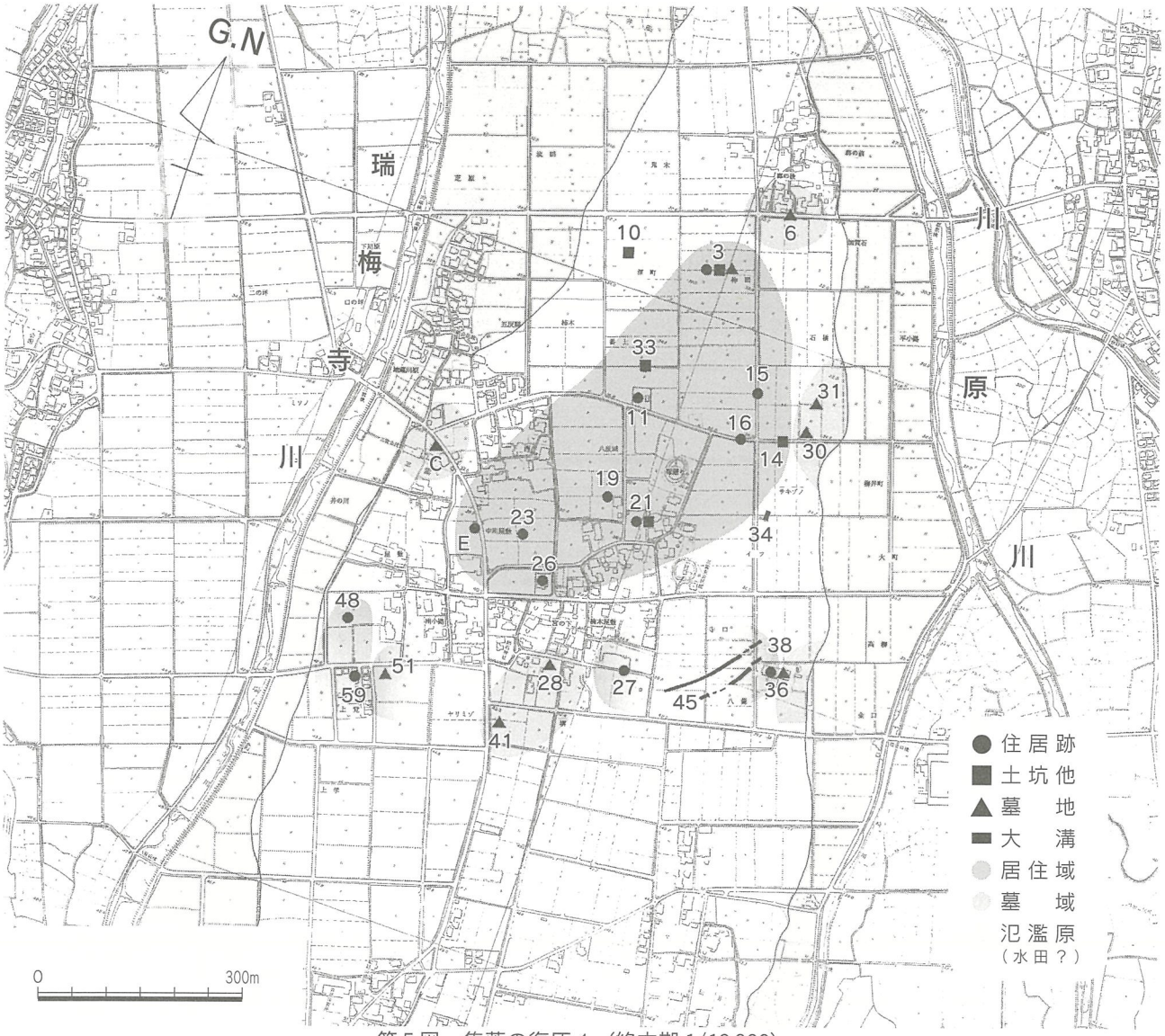
一方、中期末～後期初頭には南小路Ⅰ－５～７区で、中国鏡５７面以上を副葬した２基の甕棺を主体部とする墳丘墓（三雲南小路王墓）が検出されている。この時期には墓地はほぼ南部に集中しており、それとは別の場所にこの墳丘墓が造営される。このことから墳丘墓は特別な人物（王）のための墓地として、一般成員の墓地とは隔絶した場所に占地したことが考えられる。また、井原ヤリミゾ2582番地他からは道路の拡幅に伴う調査で後期前半から後半の甕棺墓、木槨墓（？）、木棺墓、石棺墓が検出されており、方格規矩鏡、内行花文鏡片、ガラス玉総数７０００個などが出土している[註4]。井原ヤリミゾ地区の墓域は、堺地区から続くものである可能性もあるが、銅鏡を副葬するものが見られるなど有力者集団の墓地と考えられるため、一般の共同墓地とは区別されるものと考えておきたい。

４．終末期

北部の仲田Ⅰ―１６区から中央部の宮の下地区にかけて住居跡、土坑が検出されている。墓地は、加賀石Ⅰ―１・５区、仲田Ⅰ―１６区、石橋Ⅱ―８・１２区、堺Ⅰ－２～４区、下西526-1番地他から終末期以降の石棺墓、甕棺墓が検出されている。

南部では八龍Ⅰ―７区、堺Ⅰ－１３区から甕棺墓が、八龍Ⅰ―７区から住居跡が検出されている。

南西部では南小路Ⅲ－３区、上覚450-2番地から住居跡が、上覚Ⅰ－６区から甕棺墓、石棺墓が検出されている。



第５図　集落の復原４（終末期 1/10,000）

この時期の集落は前代の構造を基本としているが、それまで南部に集中していた墓地が北部、中央部（東側・西側）、西南部に形成され、居住域と墓域の区別が不明瞭になっている[註8]。このことから終末期のうちに集落の基本的な構造が変化し始めた可能性が考えられる。

Ⅳ　まとめ

以上みてきたように三雲・井原遺跡において弥生時代の集落は早期から前期前半にはすでに形成されている。初期の集落は支石墓を中心に形成されていたようであるが、支石墓は上石が２ｍを越える大型のものばかりで、柳葉形磨製石鏃や碧玉製管玉などの副葬品を持つという同期の支石墓としては非常にまれな要素を持つ。このことはこの時期の集落内にすでに一般の成員とは異なる指導的な立場の人物（集落の長）が存在したことを想定させる。また、柳田康雄氏によればこの支石墓の被葬者は朝鮮半島からの渡来人かまたはその直系の子孫であったと考えられている（柳田 2002）。前期後半になると井田用会、井田御子守支石墓の周辺の状況は不明であるが、番上地区や八龍・寺口地区に集落が成立する。この時期には５ヶ所程度の集落が遺跡内に点在していたと想定される。

前期末から中期前半においては、前代の集落が継続する形で存在している。この時期には集落構造に大きな変化はないと考えられる。ただ、番上地区の集落が他の集落に比べてやや面積が広いようであり、この時期の三雲・井原遺跡の中心的な集落であった可能性が考えられる。北部九州においては一般的にこの時期から墓への青銅器の副葬が始まり、隣接する早良平野に見られる吉武高木遺跡のような有力者の特定集団墓が出現しているが、三雲・井原遺跡内においては今のところ、青銅器を副葬した墓は確認されておらず[註9]、後の三雲南小路王墓への発展段階を示す墓は確認されていない。また、伊都国が成立する経済基盤として今山の石斧製作専業集団の存在があると考えられている（武末1993）が、この時期に後の伊都国の中心となる三雲・井原集落がこれを掌握しうるほど糸島地方の他の集落に比べ特に有力であったかどうかは不明である。現状では遺物や遺構等について、他の集落との決定的な差は見出せない。三雲南小路王墓が成立し、伊都国の中心的な集落となる要因は、この時期の三雲・井原集落にはみられない。これについては今後の大きな課題である。

中期後半になるとそれまで散在していた集落がまとまり、遺跡の中央部に大規模な居住域が形成される。南西部にも居住域が形成されるが、中央部と一体の居住域を形成するかどうかは不明である。これに伴い各居住域ごとに形成されていた墓域が、南部に集中して形成されるようになる。また、居住域と墓域を画すると考えられる２条の大溝もこの時期には存在していたと考えられる。この状況は後期後半まで続くと考えられる。

また、下西534番地から検出された平面「コ」の字形の溝は、一辺５４．５ｍの方形区画になる可能性があり重要である。方形区画であれば集落の指導的立場の人物（集団か？）の居館である可能性も考えられ（武末1998）、三雲南小路王墓との関係から王の居館と墓地のセットとして捉えられる可能性がある。

中期末には南部に形成された墓域とは隔絶した南西部に三雲南小路王墓が造営される。この地区には先述のとおり居住域が形成されており、王墓以外の墓地は終末期になって上覚地区にみられるのみである。江戸時代に発見された井原鑓溝王墓や倭人伝の記述から想定される歴代の王墓が三雲南小路王墓を含む一定の墓域を形成するのかどうかは不明であるが、南小路Ｉ－５～７区から上覚地区の東部、ヤリミゾ地区、井原ヤリミゾ地区の東部にかけては王墓を含む特別な墓域であった可能性を考えておきたい。

また、屋敷地区では青銅器生産工房が存在する可能性も考えられ、王墓や方形区画の存在など、この時期に南西部は三雲・井原遺跡内においても特殊な地域であった可能性が考えられる。

三雲南小路王墓の出現により魏志倭人伝に記される伊都国が成立したと考えられ、これ以後、三雲・井原集落は後期を通して伊都国の中心的な集落となる。また、王墓から出土する銅鏡をはじめとした中国製の遺物は漢王朝との交流が盛んであったことを物語っており、特に番上地区で多量に出土した楽浪土器は楽浪郡の人々が当地に滞在した可能性を考えさせ（武末1994）、対外交流の中心が三雲・井原集落であったことも証明している。

終末期になると集落の構造に変化が見られる。それまで、南部に集中していた墓域が北部、中央部の周辺、西南部にみられるようになる。一方、墓域であった南部に住居跡がみられるようになる。この時期は弥生時代から古墳時代への移行期であり、この社会の変化が三雲・井原集落の構造に直接影響を与えたかどうかは判断できないが、可能性としては考えておかなければならないだろう。

現在、三雲・井原遺跡の調査面積は全体の１割にも満たない。これまでの調査成果をもとに三雲・井原遺跡の集落について復原を試みたが、実態を解明するにはまだまだ資料不足の状況である。また、遺跡内の微地形の復原も集落構造を考えるうえで重要な要素となるが、これについても現状では資料が不足している。今後の調査の進展に期待したい。

（註）

１．三雲・井原遺跡の集落については橋口達也氏（橋口1987）、小沢佳憲氏（小沢2000）が北部九州の弥生時代の集落について論じる際に取り上げている。また、岡部裕俊氏により集落の復原（森1989）が行われている。

２．中期末以降の時期区分については柳田康雄氏の編年（柳

田1987・1991）による。中期末～後期初頭は後期１式、後期前半については後期２～３式、後期後半については後期４～５式とする。なお、柳田氏は庄内並行期を古墳時代早期とし土師器Ｉ式としているが、本稿ではこの時期を終末期とする。

３．平成15年度前原市教育委員会により調査。平成18年３月報告書刊行予定。内容については調査者の牟田華代子氏よりご教示を受けた。

４．三雲・井原遺跡の中央を南北に縦断する県道の拡幅に伴い、平成16年度前原市教育委員会により調査。平成18年３月報告書刊行予定。内容については調査者の楢崎直子氏よりご教示を受けた。

５．小沢佳憲氏は三雲・井原遺跡の居住域が中央部に集中し大規模化する時期を中期前半（須玖Ｉ式）としている（小沢2000）が、各時期の遺構の分布状況から考えると中期後半（須玖II式）と考えられる。

６．平成１７年度の調査で寺口II―１７区と八龍Ｉ－３・１１区、八龍２２１番地の間でも大溝の存在が確認された。

７．南小路４６９番地では焼土坑からガラス製の管玉、小玉が出土している。焼土坑は周辺の中世の鍛冶遺構に伴う可能性が高く、弥生時代の生産遺構である確証はないが、周辺で弥生時代のガラス製品生産が行われた可能性も考えられる。（牟田・岡部編2002）

８．集落内の集団ごとに墓域を造営し始めた結果であろうか。

９．前原町文化財分布地図（原田1974a・b）等によれば、三雲の西部や井原などに４ヵ所の青銅器出土地が記載されているが実態不明である。唯一、井原赤崎から出土した細形銅剣（柳田1983）が現存する。

《参考文献》

小沢佳憲　2000　「集落動態からみた弥生時代前半期の社会」『古文化談叢』第４５集　九州古文化研究会

武末純一　1993　「交易はどのように行われたか」『新視点日本の歴史―第１巻　原始編―』新人物往来社

武末純一　1994　「弥生時代の朝鮮半島系土器」『倭人の世界―楽浪海中の弥生文化―』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

武末純一　1998　「弥生環溝集落と都市」『古代史の論点３　都市と工業と流通』小学館

橋口達也　1987　「聚落立地の変遷と土地開発」岡崎敬先生退官記念事業会編『岡崎敬先生退官記念論集　東アジアの考古と歴史』中　同朋舎

原田大六監修　1974a　『前原町文化財地図』前原町史編集会

原田大六監修　1974b　『前原町文化財地名表』前原町教育委員会

森浩一　1989　『図説　古代の日本３　米と金属器の時代』中央公論社

柳田康雄　1983　「糸島地方の弥生遺物拾遺」『九州考古学』５８九州考古学会

柳田康雄　1987　「高三潴式と西新町式土器」『弥生文化の研究４　弥生土器II』雄山閣出版

柳田康雄　1991　「土師器の編年―九州―」『古墳時代の研究６　土師器と須恵器』雄山閣出版

柳田康雄　2002　『九州弥生文化の研究』学生社

《報告書》

１．柳田康雄編　1980　『三雲遺跡　Ｉ』福岡県文化財報告書第５８集

２．柳田康雄・小池史哲編　1981　『三雲遺跡　II』福岡県文化財報告書第６０集

３．柳田康雄・小池史哲編　1982　『三雲遺跡　Ⅲ』福岡県文化財報告書第６３集

４．小池史哲編　1983　『三雲遺跡　Ⅳ』福岡県文化財報告書第６５集

５．柳田康雄編　1985　『三雲遺跡　南小路地区編』福岡県文化財報告書第６９集

６．川村博　1982　『井原遺跡群』前原町文化財報告書第８集

７．川村博　1984　『三雲遺跡群Ｉ』前原町文化財報告書第１３集

８．岡部裕俊・川村博・石井芙美子・林覚編　1985　『井原遺跡群Ⅳ』前原町文化財報告書第２１集

９．岡部裕俊　1987　『井原遺跡群』前原町文化財報告書第２５集

10．角浩行　1997　『三雲・井原遺跡群Ｉ』前原市文化財報告書第６３集

11．牟田華代子・岡部裕俊編　2002　『三雲・井原遺跡II』前原市文化財報告書第７８集

12．牟田華代子編　2003　『三雲・井原遺跡Ⅲ』前原市文化財報告書第８２集

13．平尾和久編　2004　『三雲・井原遺跡Ⅳ』前原市文化財報告書第８６集

14．岡部裕俊編　1991　『井原遺跡群』前原町文化財報告書第２５集

伊都国歴史博物館紀要　創刊号

発行日　平成18年3月31日

発　行　伊都国歴史博物館
福岡県前原市大字井原916番地
TEL 092－322－7083

印　刷　前原相互印刷株式会社

伊都国歴史博物館

ITOKOKU HISTORY MUSEUM